

## 災害と暴力を超えて

### ルカによる福音書 21 : 5 - 36

21:05 ある人たちが、神殿が見事な石と奉納物で飾られていることを話していると、イエスは言われた。  
21:06 「あなたがたはこれらの物に見とれているが、一つの石も崩されずに他の石の上に残ることのない日が来る。」  
21:07 そこで、彼らはイエスに尋ねた。「先生、では、そのことはいつ起こるのですか。また、そのことが起こるときには、どんな徴があるのですか。」  
21:08 イエスは言われた。「惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『わたしがそれだ』とか、『時が近づいた』とか言うが、ついて行ってはならない。  
21:09 戦争とか暴動のことを聞いても、おびえてはならない。こういうことがまず起こるに決まっているが、世の終わりはすぐには来ないからである。」  
21:10 そして更に、言われた。「民は民に、国は国に敵対して立ち上がる。  
21:11 そして、大きな地震があり、方々に飢饉や疫病が起こり、恐ろしい現象や著しい徴が天に現れる。  
21:12 しかし、これらのことがすべて起こる前に、人々はあなたがたに手を下して迫害し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために王や総督の前に引っ張って行く。  
21:13 それはあなたがたにとって証しをする機会となる。  
21:14 だから、前もって弁明の準備をするまいと、心に決めなさい。  
21:15 どんな反対者でも、対抗も反論もできないような言葉と知恵を、わたしがあなたがたに授けるからである。  
21:16 あなたがたは親、兄弟、親族、友人にまで裏切られる。中には殺される者もいる。  
21:17 また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる。  
21:18 しかし、あなたがたの髪の毛の一本も決してなくならない。  
21:19 忍耐によって、あなたがたは命を勝ち取りなさい。」  
21:20 「エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら、その滅亡が近づいたことを悟りなさい。  
21:21 そのとき、ユダヤにいる人々は山に逃げなさい。都の中にいる人々は、そこから立ち退きなさい。田舎にいる人々は都に入ってはならない。  
21:22 書かれていることがことごとく実現する報復の日だからである。  
21:23 それらの日には、身重の女と乳飲み子を持つ女は不幸だ。この地には大きな苦しみがあり、この民には神の怒りが下るからである。  
21:24 人々は剣の刃に倒れ、捕虜となってあらゆる国に連れて行かれる。異邦人の時代が完了するまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされる。」  
21:25 「それから、太陽と月と星に徴が現れる。地上では海がどよめき荒れ狂うので、諸国の民は、なすすべを知らず、不安に陥る。  
21:26 人々は、この世界に何が起こるのかとおびえ、恐ろしさのあまり気を失うだろう。天体が揺り動かされるからである。  
21:27 そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る。  
21:28 このようなことが起こり始めたら、身を起こして頭を上げなさい。あなたがたの解放の時が近いからだ。」  
21:29 それから、イエスはたとえを話された。「いちじくの木や、ほかのすべての木を見なさい。  
21:30 葉が出始めると、それを見て、既に夏の近づいたことがおのずと分かる。  
21:31 それと同じように、あなたがたは、これらのことが起こるのを見たら、神の国が近づいていると悟りなさい。  
21:32 はっきり言うておく。すべてのことが起こるまでは、この時代は決して滅びない。  
21:33 天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」  
21:34 「放縦や深酒や生活の煩いで、心が鈍くならないように注意しなさい。さもないと、その日が不意に罌のようにあなたがたを襲うことになる。  
21:35 その日は、地の表のあらゆる所に住む人々すべてに襲いかかるからである。  
21:36 しかし、あなたがたは、起ころうとしているこれらすべてのことから逃れて、人の子の前に立つことができるように、いつも目を覚まして祈りなさい。」

イエス様は人々からの質問に答えるときに、そのような質問を持つこと自体が問題だというような答えをされることがあります。「この盲人の目が見えないのは、誰の罪のせいですか？」という問いに対して、「誰の罪でもない。神の業が現れるためだ。」とおっしゃって、癒しを行われました（ヨハネ 9:3）。「私の愛すべき隣人は誰ですか？」という質問に対して、良きサマリア人の話をし、「誰が傷ついた人の隣人になったか？」と、逆に質問し

返されました。今日の箇所でも同じです。当時人々は世の終わりが来る、その「徴」、つまり兆候が、自然災害や戦争など、世の中がめっちゃめっちゃになることだという考えが世間を騒がせていました。キリスト教徒の中にもそういう考えを吹聴する者がいたのかもしれませんが。けれどもイエス様は、そのような騒乱を世の終わりの「しるし」と考えて右往左往すること自体に警告を発し、落ち着いた生活をするよう促されたのです。現代でも、たとえばアメリカのブランチダビデアンや人民寺院などといったカルト団体が、世の終わりを教義にして人々を恐怖でコントロールしました。日本でも、統一教会やオウム真理教が同じようなことをやっています。

イエス様はそのような考えを真っ向から否定されました。「惑わされないように気をつけなさい」(21:8)。カリスマ的な教祖が現れる。戦争やテロが起こる。地震や飢饉や天体に異常現象が現れる。迫害が起こる。こうしたことは起こるかもしれないが、それらは世の終わりとは全く関係ないとおっしゃるのです。確かに聖書の考えの中に「終末論」と呼ばれるものがありますが、世界の終末はこの世の壮大な力が動く事柄とは無関係なのだ。むしろこうした壮大さに目を奪われるのではなく、静かに語りかける神の言葉に促されて生きることを勧めています。旧約聖書の列王記上 19 章 11 節 12 節に次のような一節があります。「主は、『そこを出て、山の中で主の前に立ちなさい』と言われた。見よ、そのとき主が通り過ぎて行かれた。主の御前には非常に激しい風が起こり、山を裂き、岩を砕いた。しかし、風の中に主はおられなかった。風の後に地震が起こった。しかし、地震の中にも主はおられなかった。地震の後に火が起こった。しかし、火の中にも主はおられなかった。火の後に、静かにささやく声が聞こえた。」真の終末は、もっと静かなもので、イエスが天に上げられたように、天から下ってこられる(使徒 11:11、ルカ 21:17) と言うのです。

キリスト者自身も、世界の怒涛のごとき大きな流れに飲み込まれ翻弄されたかに見えることもあるだろう。そうした力に迫害され苦しむこともあるだろう。けれども「それはあなたがたにとって証しをする機会となる」(ルカ 21:13)。あなた方が何の準備もできないような、その状況の中で、あなたの力を超えた神の力があなたをとらえ、「どんな反対者でも、対向も反論もできないような言葉と知恵を…授ける」(ルカ 21:15)。実際、使徒言行録が物語る教会の発展は、迫害のためにキリスト者が逃げ出したことがきっかけでした(使徒 8:1~4)。パウロもとらえられローマへ護送されることによって、念願だったローマ伝道を果たしたのです(使徒 27~28 章)。目に見える力、この世のいかにも大きな、圧倒的な力…それとは別次元の力によって、気が付いたら伝道していたという形でキリスト者は運ばれていくのです。初代教会には伝道プランもなかったし、宣教方針もなかったのです。

目に見える人を圧倒するような力(被造物の力)と、静かに人知れず働く神の力との対比を、ルカによる福音書は、前節(1~4 節)にある「レプトン銅貨二枚」のイメージと、本節(5~6 節)の強大な建築物との比較で、文学的な効果によって巧みに演出しています。この世的な力と神様の力の対比を、イエス様は、いちじくの木のとたとえて話されました(29~21 節)。いちじくの葉が出始めると何を考えますか。夏が来たと思いますか? 私は思いません。大きな実(実は花だそうですが)がたくさんなるといいなと思います。夏が来たなんて思いもしませんよ。でも、そう…、言われてみれば、夏は確かに近づいています。

目に見えて大きなものに目を奪われていると、金持ちのセレブはいいなと思ひ、きちきちの貧乏生活に心が荒んでくるなあ…という考えが浮かんできます。かたや飽食や浪費、かたや貧困のみじめさ…。こうしたことで「心が鈍くならないように」とイエス様は警告されます(34 節)。なぜなら、神様の力は、いつの間にか働いている

からです。あなたの困窮、今苦しんでいること、それは本当に苦しいです。(今日もそういう重いものを心に抱えて礼拝に来ておられる方もいらっしゃることでしょう。)でも、それが気づいてみるといつのまにか、「それがなかったらもたらされなかったような祝福」に変わろうとしています。その苦しみこそが祝福に変わる。この信仰の目をもっていなければ、その祝福を取り逃して、「襲いかかる」災いのままで終わってしまいます。(いちじくの実にばかり気を取られている人には、夏が近いことが視界に入らないように。)それが、35~36節の言わんとするところです。

心理療法に「ミラクル・クエスチョン」と言うのがあります。これはうつ病患者をたちどころに癒してしまうので、「ミラクル」(奇跡の)と呼ばれていて、心理療法の秘伝中の秘伝とされています。セラピストはクライアントにこう質問します。「今こうしている間に、私たちの知らない間に、あなたの抱えている問題がすべて解決してしまったとします。そしてこれから家に帰って、玄関を開けてから、この問題が解決してしまっていることを、どんな兆候によって知ることができますか？」クライアントにその兆候を考えてもらいます。そしてこう言うのです。「では今日家に帰ってから、この兆候を探してみてください。」多くのうつ病患者は、悪いことばかり目を向けてしまいます。この宿題を出すことで、視点が変わるので。

西洋において心理療法が発達したのも、キリスト教の文化の中で、イエスがある種のモデルだったからではないかと私は思うことがあります。イエス様は、人々の視点を変えました。この世の、壮大で、圧倒的で、暴力的な力に目を奪われている人々が、小さく、見えないところで、いつのまにか働いている神様の力へと視線を変えられるようにされたのです。神殿の見事な石、荘厳な装飾、林立する超高層ビル、超頭のいいカリスマ的人物、地響きを鳴らして行進する軍隊・戦車、地震、津波、エボラ出血熱、異常気象、家族崩壊…イエスがここで言われたことは今も起こっています。しかしながら、こうしたことが神の力の兆候だと勘違いしてはいけません。こうした力とは全く異質な力が私達を守っています。この世の力に翻弄されながらも、私達の髪の毛一本も決して失われることはないのです(ルカ 21:19)。そのことに目覚めていきましょう(36節)。エルサレムでの迫害から世界宣教が始まったように、またパウロの逮捕、投獄、監禁、護送からローマ伝道の道が開かれたように、私たちの苦悩の中で思いもよらない素晴らしいことが起こる。静かな神様の業です。それは明日かもしれません。いや、今日家に帰ったその時に始まっていることかもしれません。その兆候をいつも探している視線を持つようではありませんか。